

ハチ博士の ミツバチコラム

18



京都学園大学
バイオ環境学部
坂本文夫教授

枇杷(びわ)とミツバチ

とを聞いていたとか。

枇杷の実の甘酸っぱい味を好む人は多いと思いますが、枇杷の花が晩秋からお正月にかけて約3カ月間も咲き続け、ミツバチ達の冬の貴重な蜜源になっていることはご存知でしょうか？特に、寒さに強いニホンミツバチは気温が10℃を超える日には枇杷の花を訪花してたっぷり貯まった蜜を集めて巣に戻ります。新年早々からミツバチ達の役に立っている枇杷の花に敬意を表して今年は枇杷の話から始めます。

古事談という古い書物の中に蜂飼いの大臣と呼ばれる太政大臣、藤原宗輔が登場しますが、蜂をペットのように可愛がり、蜂も飼い主のいうこ

「蜂の巣にはかに落ちて、御前に多く飛び散りければ、人々、刺されじとて騒ぎけるに、宗輔公、御前に枇杷のありけるを、一房とりて、皮をむきて、上げられたりければ、蜂あるかぎり枇杷にとりつきて散らざりければ、供人にやをらいたまひけり。」

つまり、「蜂の巣が突然落ちて、沢山の蜂が飛び騒いでいるのを、宗輔は枇杷の実をむいて高く掲げたところ、蜂の群が集まって騒ぎは収まった。」とのこと。

暑い時季にニホンミツバチの巣が落ちて興奮して飛び回っているのを、枇杷の実を掲げて集結させた、と私は解釈しました。そうであれば、枇杷の実にはニホンミツバチの群を集結させる成分が含まれているのではないか？その成分を現代科学の技術で解明したら、逃亡群を捕獲できるのではないか？と知っているのですが…。



イラスト おおくぼひとみさん